

イスラーム的価値観をめぐる相違と「過激化」問題 —タイ深南部におけるサラフィー主義の受容に着目して—

西 直美

同志社大学研究開発推進機構特別任用助手

要旨

本稿では、1980年代以降タイで顕著になったイスラーム復興の流れのうち、とくにサラフィー主義に注目し、イスラーム的価値観の相違をめぐる対立と現地におけるサラフィー主義の受容について検討を行う。2004年にタイ政府と反政府武装組織の抗争が再燃すると、タイではムスリムの過激化が問題視されるようになった。しかし何を過激と捉えるかという問題は、何重にも政治化されている。タイ政府にとって過激が意味するのは、分離独立主義とその支持者のことである。サラフィー主義は分離独立主義から距離を取ることでタイ政府と安全保障上の問題を回避する一方で、村落部においては共同体の変化をもたらす思想として危険視されている。本稿では深南部におけるイスラーム的価値観をめぐる相違を検討したうえで、サラフィー主義は泥沼化する紛争のなかでムスリムとしての帰属意識を犠牲にすることなく、分離独立主義から距離を取ることを可能とする拠り所を人々に与えている側面があることを指摘したい。

キーワード

タイ深南部、ナショナリズム、伝統主義、サラフィー主義、過激化

**Conflicting Interpretations on Islamic Ideologies
and the Notion of Radicalization:
Focusing on the Acceptance of Salafism in the Deep South of Thailand**

Naomi Nishi

Assistant

Organization for Research Initiatives and Development, Doshisha University

Abstract:

The radicalization of Muslims has been receiving attention in Thailand, especially since the escalation of the violence in the Muslim-dominated south in 2004. However, the notion of radicalization itself is highly politicized. In this paper, I examine competing Islamic values and the influence of Salafism in a remote Malay village in the deep south of Thailand. The influence of Islamic revivalism and Salafism has grown in Thailand since the 1980s, and tensions between traditionalists have been pointed out in various research works. In this paper, I argue that Salafism in the deep South of Thailand provides: 1) an alternative for those who want to disassociate themselves from separatism and 2) an ideological platform for avoiding conflict with the state without leaving their Muslim identity. Although “Salafis” share with the traditionalists common grievances against the state, they prefer an “apolitical” attitude as a political stance to survive under the stalemated conflict they experience in everyday life.

Keywords:

Deep south of Thailand, Nationalism, Traditionalists, Salafism, Radicalization

1. はじめに¹

本稿の目的は、タイ深南部²を事例として、イスラーム的価値観の相違をめぐる対立とサラフィー主義受容の背景について考察することである。タイにおいて1980年代以降顕在化したイスラーム復興に関する議論は、タブリーギー・ジャマーアト (Tablighī Jamā‘at、ウルドゥー語で宣教団、以下タブリーグ) とサラフィー主義を中心に展開してきた。タブリーグは、北インドを起源とする個人の改革と精神的な向上を強調する宣教を中心に据えた組織で、タイ深南部のヤラー県に東南アジア最大級の宣教センターを設置している。クルアーンとハディースに基づく宗教実践改革を志向するサラフィー主義は、1980年代後半にサウジアラビアなどから帰国した指導者によって率いられ、都市中間層に顕著にみられることが指摘される³。イスラーム復興の流れで生じた新しい動きは、深南部の伝統社会とのあいだで摩擦を引き起こし、それらは新旧の対立として論じられてきた。

マレーシアとの国境に近い深南部は、マレー語パタニ方言を母語するムスリムが多数派を占めている。1960年代から分離独立運動が続いてきたものの、1990年代には沈静化したと考えられていた。2004年1月にナラティワート県の軍基地から銃器が奪われる事件を境に情勢が悪化し、ムスリムの過激化として問題視されるようになった。一見のどかな田舎には治安部隊による検問が張り巡らされ、武力衝突や襲撃事件が断続的に生じている。非日常であるはずだった紛争は、7000人近い犠牲を伴いながら15年以上の歳月のなかで人々にとっての日常になりつつある⁴。事件の原因が不明である場合も多く、ローカルな権力闘争や地下組織の暗躍、公権力側による自作自演も疑われる。深南部の大部分は戒厳令と首相緊急令のもと治安部隊の影響下に置かれ、警察や軍による逮捕状なしの拘留、拷問などの人権侵害も多発してきた。こうした状況下で説得力をもつのが、タイ政府との戦いをジハードだとみなす考えである。他方サラフィー主義者は、しばしば「ワッハービー」(Ar./wahhābī/ワッハーブ主義、ワッハーブ主義者) と呼ばれ、伝統的な共同体を破壊する思想として否定的に捉えられている。その理由の一部に、サラフィー主義者がタイ政府と良好な関係を築いているという事実がある。

何が過激とみなされるかは何重にも政治化され、深南部におけるイスラーム的価値観の相違は、タイ政府との関係性という軸に沿っても理解されている。本稿ではまず、深南部問題について歴史を中心に概観し、タイのサラフィー主義について検討したのち、サラフィー主義の村落部における受容について考察していく⁵。最後に、泥沼化する紛争のなかでサラフィー主義は人々にムスリムとしての帰属意識を犠牲にすることなく、分離独立主義と距離を置くことを可能とする抛り所を与えている側面があることを指摘したい。

2. タイ深南部紛争

2-1. 深南部問題の起源

2004年にタイ深南部における紛争が激化すると、反政府運動が果たしてグローバルなジハード主義へと変容していくのか、という点が大きな関心を集めた。タイ深南部における紛争は、歴史、宗教、政治が複雑にからみあって展開している。2019年3月、深南部各地にカラスプレーで書かれた110という数字が現れた。110という数字は、道路や2019年3月24日の総選挙に向けて設置されていたポスターの上にもみられた。110年前の1909年3月10日、当時のサヤーム王国とイギリスのあいだで、国境を確定する条約が締結された。タイは、影響下にあったケランタン、トレンガヌ、クダ、プルリスのマレー4州をイギリスに割譲する代わりに、イギリスの治外法権の放棄と鉄道建設のための融資を得た。15世紀から続くマレー系スルタン王国パタニは公式に近代国家タイの一部となり、パタニ王国の解体は決定的なものとなった。

列強による植民地化の脅威に直面したタイでは、ラーマ5世（在位1868-1910）の下で中央集権的な行政改革と近代的な領域国家形成が行われ、ラーマ6世（在位1910-1925）の下でタイ・ナショナリズムの原型が構築された。ラーマ6世によって示された「ラックタイ」（Th./lakhai/タイ的原理）は、民族、宗教、国王への絶対的忠誠から構成される。1932年の立憲革命で親王専制体制が打倒されたのちに制定された憲法では、仏教徒である国王が全ての宗教の至高の擁護者であることが定められた。1938年に政権についた軍人プレーク・ピブーンソンクラム（在任1938-1944、以下ピブーン）は、1942年1月までに12号に及ぶ「ラッタニヨム」（Th./ratthaniyom/国民信条）を公布し、新時代にふさわしい文明的な国民文化の構築を目指す政策を実施した。1939年の第1号では国名がサヤームからタイに改められ、住民を民族で隔てず等しくタイ人と呼ぶべきである（第3号）、国家、国旗、国王賛歌への敬意（第4号）、タイ語の習得（第9号）などタイ・ナショナリズムに基づく国民の形成が本格化していった⁶。

分離独立主義は、19世紀後半から始まったタイの近代国家形成と中央集権化に対する、旧パタニ王国のエリート層の抵抗を起源としている。深南部紛争がエリート間の闘争を超えて、マレー・ナショナリズム運動に展開していく一つの分岐点になったのが、1948年4月28日にナラティワート県のドゥソン・ヨーで生じた蜂起である。これはしばしば、パッターニー県イスラーム委員会の長であったハジスロン・アブドゥルカディール（1894-1954、以下ハジスロン）に触発された反乱であると理解されている。エジプトのイスラーム改革思想家ムハンマド・アブドゥの影響を受けたハジスロンは、1927年にメッカから帰郷するとイスラームとマレー・ナショナリズムに基づく社会改革と秩序構築を目指す活動を行い、民衆

から大きな支持を得ていた。

ピブーン政権期における強権的な同化政策は、マレー・ムスリムの大きな反発を引き起こした。第二次世界大戦中のマレー・ムスリムの闘争は、戦後にマラヤ連邦への加入を目指す形で展開していた。1944年8月にピブーンが失脚すると、政府は南部ムスリム地域の状況改善を目指して融和的な政策を実施した。1945年5月「イスラームの擁護に関する勅令」が制定され、イスラーム行政の組織化が行われた。1946年12月には、ムスリムが過半数を占める南部4県についてイスラーム法に基づく裁判を認める「パッターニー県、ナラティワート県、ヤラー県、及びサトゥーン県におけるイスラーム法の適用に関する法律」が定められた。

タイの民事裁判の一部としてイスラーム裁判を導入することに対するムスリム指導者の反発は大きかった。とくに、ハジスロンは「カーフィル」(Ar./kāfir/非ムスリム)がムスリム裁判官を指名することはできないと反対を示し、政府から要注意人物と目されるようになる⁷。深南部における公権力、とくに警察による暴力行為や汚職は続いていた。1947年4月3日ハジスロンらは、ムスリムが多数を占める南部4県でマレー・ムスリムによる自治を実現するための7つの要求をタイ政府に提出した⁸。当時の様子を、同年9月に深南部を訪れた記者バーバラ・ウィッティンガム・ジョーンズはこのように記している。

(…) 外部の世界からの完全な隔絶によって、パタニは恐怖政治に対してなすすべを持たない。政権に対するもっとも緩やかな批判でさえも、危険な会話とみなされ、死か脅迫によって抑圧される。パタニ・マレーには言論の自由がない、新聞はなく、ラジオが少しあるだけで、政治機構も存在しない⁹。

1946年7月にラーマ8世王が怪死し、戦後の混乱が続くなか1947年11月8日のクーデターによりピブーンが返り咲いた。バンコクにおける政変を目の当たりにしたハジスロンらは国際社会の支援を求めるとともに、1948年1月29日に行われる予定であった総選挙のボイコットを計画したとされる¹⁰。1948年1月16日、ハジスロンは国家反逆罪で逮捕・起訴された。マレー・ムスリムとタイ政府とのあいだで続いてきた緊張関係は最高潮に達し、4月28日のドゥソン・ヨー蜂起に至る。衝突により400名に及ぶ民衆と30名の警察官が死亡、マレー・ムスリム側の犠牲者の多くは女性や子供、老人であった¹¹。イギリスは、アメリカがタイを支援していたこととタイからのコメ輸出拡大の必要性からタイに配慮し、パタニのマラヤ連邦への加盟は絶望的となった。有罪判決を受けて収監されたハジスロンは、1952年に出所した後、1954年に謎の失踪を遂げた。タイ警察によって8月13日の夜に殺害され、ソンクラー県の海の底に沈められたと信じられている¹²。

2-2. パタニにおけるジハード

2004年1月4日、ナラティワート県下の20の公立学校と2つの交番が放火され、軍基地から400丁以上の銃器が奪取された。タクシン・チンナワット（在任2001-2006）は、戒厳令を敷くと同時に治安部隊を大幅に増員した。2004年4月28日、軍と警察の駐留所が襲撃されたのち、パタニ王国の歴史遺産であるクルセ・モスクに立てこもった32名を含む107名が軍によって殺害される事件が生じた（クルセ・モスク事件）。同年10月25日、政府による不当逮捕に反対する市民のデモ隊に対して軍が発砲し7名が死亡、拘束者の移送中に78名が窒息死する事件が生じた（タクバイ事件）。2004年に生じた2つの事件は、深南部のマレー・ムスリム社会に深い傷を残している。

クルセ・モスク事件が生じた4月28日という日付の歴史的重要性は、研究者によっても指摘されている¹³。タイの歴史でドゥソン・ヨー反乱と記録される民衆蜂起は、深南部のマレー・ムスリムのあいだでドゥソン・ヨー戦争と呼ばれてきたのである¹⁴。クルセ・モスク事件では、死亡した戦闘員からマレー語のアラビア文字表記であるジャウィで記された『ベルジハード・ディ・パタニ』（M./Berjihad di Patani/パタニにおけるジハード）という冊子が発見された。61に及ぶ、その多くは戦いに関するクルアーンの章句を引用しながら、奪われた土地を取り戻し、イスラームを守るための闘争をジハードとして鼓舞したものである。全65頁の冊子ではまず、メディナ時代における預言者ムハンマドと教友たちの戦いを引きつつ、イスラームにおける敵とはカーフィルと彼らを後見とする「ムナフィーク」（Ar./munāfiq/偽信徒）であることが確認される。奪われた土地を取り戻す要求を行うことはマレーの血を受け継ぐ者の義務であり、パタニを侵略した敵であるカーフィルや裏切り者のムナフィークを殺害することを恐れてはならない。イスラームの敵との戦いはクルアーンとハディースに明示されており、つまりアッラーからの命令であって、戦闘で命を失った者は「シャヒード」（Ar./shahīd/殉教者）であることが解説される¹⁵。

マレー・ナショナリズムに基づく分離独立運動が組織化されていったのは1960年代であった。1958年にクーデターで政権を握ったサリット・タナラット（在任1958-1963）は、反共主義を掲げ同盟国アメリカの支援の下で開発と教育を通じた同化政策を本格化させた。1961年には、マレー・ムスリムの同化を阻害しているとみなされた寄宿型宗教塾ポーノの登録と、宗教教育に加えタイ語を教授言語とする普通教育を行う私立イスラーム学校への改編が義務付けられた。1960年前後から勃興した分離独立派組織の多くが、国内外からの支援を得ながら活動を続けた¹⁶。現地のイスラーム指導者によって、社会主義とイスラームを融合させたマレー国家樹立を目指すパタニ民族革命戦線（Barisan Revolusi Nasional Melayu

Patani 以下 BRN) が結成されたのは 1960 年であった。1980 年代以降、タイ政府は深南部における共産主義者や「ムスリム・チョーン」(Th./muslim chon/ムスリムの無法者) への対応を、軍事力による制圧から政治的解決へと舵を切った。それを象徴する政策が、治安回復、経済発展、民衆との相互理解の促進を主眼とする「ターイ・ロムイェン」(Th./tai romyen/南の安寧) である(首相命令 66/2523 号)。90 年代には、好調な経済とマレー・ムスリムの社会参加が進んだことを背景に、武力闘争は人々の支持を失っていった。1990 年代終わりまでに多くの分離独立運動のメンバーが投降・逮捕され、分離独立運動は収束したかに思われた。

タクシン政権は深南部で生じている暴力の背景に政治的主張を認めず、「チョーン・ターイ」(Th./chon tai/南部の無法者)、麻薬常習者による犯罪行為であるとみなし強硬な対応を行った。2006 年にタクシンがクーデターで追放された後も紛争が収束することはなく、首相および治安部隊に大きな権力を付与する首相緊急令と戒厳令の下で、治安回復と住民との信頼醸成を目指す取り組みがなされている。2011 年に政権についてタクシンの実妹インラック政権下(在任 2011-2014) では、分離独立派組織との和平対話が開始された。タイ政府は深南部問題の国際問題化への懸念などから、積極的な関与を行ってきたとはいえ、和平対話の行方はいまだ不透明である。

深南部問題の文脈では、政府と異なる考えを持つ者という表現が、パタニ・マレーの武装闘争にかかわるテロリストを暗示するかたちでしばしば用いられる¹⁷。またタイ政府は、深南部の実戦部隊のほとんどを掌握しているとされる BRN に対し、直接・間接的に支援を行う人々を「ネオルアム」(Th./naeoruam/支持者) として懸念してきた。BRN によってマレー語で出された声明には、パタニ・マレー民族に対する抑圧と苦難の歴史を忘れず、人々が一致団結し、帝国主義者、植民地主義者であるカーフィル・サヤームと戦い自由を勝ち取ることへの決意、テロ対策の名のもとに行われている人権侵害と抑圧に対する怒りとタイ政府への不信感に彩られている。2015 年に YouTube 上で公開された声明は「一つの言語、一つの民族、…独立かシャヒード」という言葉で締めくくられている¹⁸。SNS の発展は情報の発信や共有を容易にし、政府や主要メディアのみならず多くの人が情報の発信に関わるようになってきている。2019 年 2 月に Facebook にあげられたタイ政府との戦いで命を落としたとされる人物の写真には、クルアーン 2 章 154 節「またアッラーの道において殺された者を死者と言ってはならない。いや、生きている。ただ、お前たちは感知しない」¹⁹が添えられていた。タイ政府との戦いで死んだ人物が、ここではシャヒードと捉えられていることがわかる²⁰。

3. サラフィー主義

3-1. ワッハーブ派とサラフィー主義

2002年のバリ島爆弾テロ事件の後、ASEAN域内の実務者との関係も強いタイの安全保障研究者は、ヤラー・イスラーム大学を中心にパターンニー、ヤラー両県に最低5千人のワッハービーが存在し、「現地のJI」には1万人のメンバーがいると見積もっている²¹。JIとは、国際テロ組織として認定されているジュマ・イスラミーヤ(Ar./al-Jamā'a al-Islāmīya/イスラーム集団)のことである。「現地のJI」はアルカイダなどとは異なりムスリムの幸福の追求を目指す社会運動であるとの説明が付されているとはいえ、2000年代初頭のタイではワッハービーはJIの本拠地があったインドネシアや、パキスタンの過激派との結びつきが懸念されていた。テロリズムについて論じる研究者らがおおむね一致するのは、ワッハービーとは過激主義の代名詞のようなものであると捉えている点である。

ワッハービーとはサウジアラビアの建国を支えた思想であり、ムハンマド・イブン・アブド・アル=ワッハーブ(1703-1791、以下イブン・アブドゥルワッハーブ)の解釈、また、その解釈に従う人々を意味する。イスラームを取り巻く情勢の悪化を受けて、2004年タイのイスラーム学者によって『カブアンカーン・ワッハービー：ニヤーム・レ・クワームマーイ』(Th./Khabuankan Wahabi: Niyam lae Khwammai/ワッハーブ主義運動：定義と意味)が出された。一般向けにまとめられた全63頁の冊子の前半では歴史的背景が解説され、イブン・アブドゥルワッハーブに反対する人々が、彼や弟子たちを貶めるためにワッハーブ派という言葉を用いたことやサウド家とのかかわり、自称としてはサラフィーヤ、サラフィーユーン、ムワッヒドゥーンが使われたことなどが説明される²²。

後半にかけてイブン・アブドゥルワッハーブの思想の核心である「タウヒード」(Ar./tawhīd/唯一神信仰)の概念について解説されたのち、彼の思想はヒジュラ暦3世紀までの初期イスラームの在り方を理想とするサラフィー主義であるとまとめられる²³。最後にタイにおけるサラフィー主義の展開が示される。サラフィー主義が初めて観察・記録されたのは、1919年バンコクにおいてである²⁴。20世紀初頭のメッカ在住のマレー人学者の手になるマレー語本が戦後のタイにおけるイスラーム改革の動きに影響を与えており、1970年にパターンニー県で出版されたイブン・アブドゥルワッハーブの『キターブ・アッタウヒード』(Ar./Kitāb al-Tawhīd/タウヒードの書)は現在でも広く用いられている²⁵。そして、タイにおける新しい世代のイスラーム学者、とくに留学をした人々の多くがサラフィー主義の影響を受けているといった内容が解説される²⁶。

1980年代以降、サウジアラビアなど中東諸国での留学を終えて帰国した指導者が、タイのイスラーム復興を率いてきた。「カナ・マイ」(Th./khana mai/新しい

集団、改革派)や「サーイ・マイ」(Th./sai mai/新しい派、改革派)とも呼ばれる、クルアーンとハディースに基づく改革を志向するサラフィー主義の流れである²⁷。サラフィー主義とはもともと、植民地化に直面したイスラーム諸国で19世紀後半に現れた思想潮流であった。預言者ムハンマドとその教友、「サラフ」(Ar./al-Salaf/父祖)の時代の原典であるクルアーンとハディースに立ち返り、イスラーム法解釈の営為を活性化することで、イスラーム共同体の復興を行うことを目指した。歴史のなかで築かれてきた権威から距離を置き、原点をより重視する流れである。タイで著名なサラフィー主義の指導者は、バンコクを中心に支持を集めるシャイフ・リダ・アフマド・サマディ²⁸と、深南部で影響力を持つイスマイル・ルッフィ・チャパキヤ(1951-、以下ルッフィ)である。ポーノを経営する一族の下で育ったルッフィは、メディナ・イスラーム大学で学士号、イブン・サウード・イスラーム大学で比較法の修士・博士号を取得して1988年にタイに帰国し、1998年にタイで初めての私立イスラーム大学であるヤラー・イスラーム大学(現ファートニー大学)を設立した。サラフィー主義の影響はファートニー大学のみならず、国立ソクラーナカリン大学(以下PSU)パッターニー校イスラーム学部、国立ナラティワート・ラーチャナカリン大学イスラーム・アラブ研究学院といった研究教育機関を中心に見られ、教員研修やカリキュラム作成を通してイスラーム初等・中等教育に対しても影響を与えている²⁹。

深南部におけるサラフィー主義には、テキスト主義的解釈、特定の伝統的実践を「ビドア」(Ar./bid'a/イスラームからの逸脱)とする、近代教育やテクノロジーをイスラーム的に再解釈する、といった特徴がある。諸外国では安全保障上の脅威とみなされる場合が多いが、深南部ではサラフィー主義者で分離独立運動に関わったとして逮捕された者はいない。深南部におけるサラフィー主義者は、タイ政府との関係では実利的な対応を取るとともに、大学における教育を中心に、小規模な学習会、慈善活動、ビジネスを通して影響力を拡大している。

3-2. サラフィー主義者によるジハード解釈

マレーシアの世論調査機関であるメルデカセンターが2018年に出した東南アジア4か国(マレーシア、インドネシア、タイ、フィリピン)の暴力的過激主義と自己犠牲の傾向に関する調査報告書によると、タイは宗教を守るために生命、自由、財産などを犠牲にする自己犠牲の傾向が4か国のなかでマレーシアと並んで高い一方、JIやイスラーム国など国際テロ組織に対する支持が4か国中でもっとも低かった³⁰。東南アジアでムスリム人口の過激化が問題視されるなか、ファートニー大学は特徴的なプログラムを実施していることで知られる。ファートニー大学では、留学生を含め全ての学生に「サンティウィティ」(Th./santiwithi

／平和的方法) プログラムの履修が義務付けられており、カントの『永遠平和のために』など欧米の思想家の著作についても学ぶ。このプログラムでイスラームを学ぶ際に用いられる教科書が、ルッフィによる『イスラーム・サーサナー・ヘン・サンティパープ』(Th./Islam Sasana haeng Santiphap／平和の宗教イスラーム)と題された冊子である。

冊子では、イスラームが慈悲と平和の宗教であることが、クルアーンの章句やハディースを軸にしつつ、イスラーム学者の解説や国内外の研究成果も引用しながらまとめられている。以下ではとくに、非ムスリムや戦闘に関わる部分をみてみたい。他者に対しては、善に誘い、良識を命じる(クルアーン第3章104節)こと、善行と畏怖のために助け合い罪と無法のために助け合ってはならない(クルアーン第5章2節)ことが説明され、クルアーン第49章13節「人々よ、われらはおまえたちを男性と女性から創り、おまえたちを種族や部族となした。おまえたちが互いに知り合うためである」を引いて、相互理解を試みるのが基本的な態度として推奨される³¹。

イスラームは平和の礎として公正さを重んじ、戦闘は、不公正や抑圧、攻撃を防ぐために一定の条件下で認められる。平和を守るという大前提を欠いた戦闘は必要な戦いとはいえ、ジハードは攻撃や抑圧、国や個人の利益のための手段とはなりえない³²。また、フダイビーヤの和議やメッカ無血開城の故事、クルアーン第16章126節でアッラーは報復を認めながらも忍耐がより良いとしていることから、寛容さが推奨され報復は自制されるべきものであるとされる³³。そして、イスラームはナショナリズムや部族主義を乗り越えるものであることが解説される³⁴。

クルアーンはムスリムに、戦争を仕掛けてこず、宗教を抑圧しない者に対しては、公正かつ徳と善行をもって接することの明確な許可を与えている。アラビア語のキスト(Ar./qist/公正)は単なる正義を意味するのではなく、イスラームにおける公正とは、戦っている敵に対しても戦っていない相手に対しても行わなくてはならない義務である³⁵。宗教に強制は禁物であるというイスラームの原則と、慈愛をもって自ら望んでイスラームに招かれることが肝要であることが確認され、クルアーン第60章9節がイスラームを受け容れない者を後見とすることを禁じているのは、侵略、抑圧、戦争を惹起するからであって、単にイスラームを受け容れないという理由からではないことが解説される³⁶。

イスラームを否定した人間を殺すことは戦いの目的とはならず、平和的方法が尽くされないうちに戦闘を行うことは推奨されない。また、イスラームの教えが届かない人物は、真実から遠ざけられたものとして祈りの対象となる³⁷。ジハードの目的とは、この世界と来世における良き生である。したがってイスラームにおいて、ジハードとは自分自身の心との戦い、教育や布教、政治やその他の方面

で人生に必要なものという意味合いが生じる³⁸。イスラームでは、無関係な市民を殺すことは厳しく禁じられ、戦時下では殺人者あるいは戦闘員でなければ殺してはならない³⁹。意図的に信仰者を殺した者は、アッラーの赦しを決して得られることはない⁴⁰。冊子では、イスラームが慈悲と平和、そして公正をもたらす宗教であることが繰り返し強調される。

4. イスラーム的価値をめぐる相違：ナラティワート県ルーソ郡の事例

4-1. 伝統とイスラーム的価値

メルデカセンターの調査に協力した PSU の教員は、カリフ制に反対するムスリムはいないことから当初はイスラーム国に対する支持があったのも事実だとした上で、アンケート結果からは学生の 98 パーセントがイスラーム国の解釈は誤りであると認識していたことが明らかであったとする。とくに強調されたのが、深南部におけるイスラーム指導者の役割である。ルッフイを代表として影響力のある指導者がイスラームに関する解釈を市民に対して伝えており、たとえば、ルッフイが何らかの事柄についてイスラーム的に誤っていると言えれば BRN のメンバーでさえも耳を貸しているのだという⁴¹。

サラフィーがエリートを中心にイスラーム改革の動きを示す言葉として定着する一方で、人々が実際に使っている言葉がワッハービーである。以下ではナラティワート県ルーソ郡において実施した現地調査のうち、とくにネオルアム（分離独立派組織の支持者）とされていた村の事例を中心に、イスラーム的価値観をめぐる相違について検討していきたい。ルーソ郡は、深南部問題に関心のある人々のあいだでは、BRN 誕生の地として知られる。ルーソ郡はタイ国鉄駅周辺に発展した市街地を除いて、ほとんどを森林地帯が占める。2004 年以降、仏教徒の公立学校校長や教員が殺害されるなど治安が悪化し、非ムスリムの多くが地域を出て行った。レッドゾーン（事件多発地域）とされ、深南部でも極めてマレー・ナショナリズムが強い保守的な地域であるとみなされている。

1980 年代から 90 年代にかけてナラティワート県で調査を行った橋本が指摘しているように、90 年代以降の村落部におけるテレビの普及には目覚ましいものがあった⁴²。家庭内におけるタイ語の使用が罪だとみなされる傾向が強かった 80 年代までとは異なり、タイのテレビ番組が視聴される光景は今ではどの家庭でも当たり前になった。しかし日常会話でタイ語が用いられることは少なく、タイ語は「パーサー・ラーチャカーン」(Th./phasa rachakan/公務の言葉)とみなされる。人々にとってパタニ・マレー語は母語であり、イスラームの言葉という表現が時折聞かれるほどマレー語とマレー語のアラビア文字表記であるジャウィは、イス

ラームと密接に結びついたものとして捉えられている。

村のイスラーム指導者たちは、マレーの伝統的な宗教実践に対して表立って批判をすることはしてこなかった。エジプトのアズハル大学を出た前「イマーム」(Ar./imām/宗教指導者)は、人々のイスラームに関する知識の不足や不正確さを問題視しながらも、人々の実践を頭ごなしに否定することはなかった。マレーシアやブルネイで宗教教員として教鞭をとりながら故郷でイマームを務めていたが、2004年以降の情勢悪化後に頻繁に帰郷することが困難となり2015年にブルネイで客死した。その後、タブリーグの中心であるヤラー宣教センターでクルアーン読誦とハディースを学んだ人物がイマームを務めている。

村では、血縁関係と伝統的実践が共同体の基盤を支えている。タイの正史では伝えられることのない土地の歴史や先祖の時代から続く苦難は日常生活のなかで細々と語り継がれ、伝統的実践とともにパタニ・マレーとしての帰属意識を支えてきた。ソクラーの海に沈められたハジスロンは、公正さを求めた人間の末路として記憶されている。海外で教育を受けた者はタイ政府から疑念の目で見られ、私立イスラーム学校やイスラーム初等教育を行うタディカなど限られた場しか活躍の場がない。

ある私立イスラーム学校教員の男性は、2000年代前半にパキスタンでの留学を終えて帰国した後、軍に連行され尋問を受けた。タイ語で事情を説明することができたため解放されたものの、タイ語ができなかった他の人間は文字通り姿を消したという。村では意味なく人を殺めることを肯定する者はいないものの、武器をもって戦うということについては少なくとも過激であるとはみなされていない。武装闘争を積極的に肯定する人々のあいだでは、ジハードには宗教と土地を守るためのジハードがあると理解されている。最初に攻撃をしかけてきたのはタイ政府側であり、防衛は当然の反応であると考えられる。2004年以降顕著になったのは、マレー・ムスリムであっても、タイ政府に協力的だとみなされた人物が武装組織の標的になる事例である⁴³。なかには軍や警察、彼らの協力者は「アンジン・カーフィル」(M./anjing kafir/非ムスリムの犬)、「バビ」(M./babi/豚)であって殺されても仕方がないという見方を示す者も存在した⁴⁴。

以上のような見方を共有する人々がイスラーム的に誤っているとは言わないまでも、一様に問題視していたのがワッハービーであった。深南部でワッハービーと呼ばれる人々は、服装や髭といった容姿、訪れるモスクや礼拝の所作などによって識別できる場合も多い。村でワッハービーは、ムハンマドの時代に無かったものを全て性急に否定し、伝統や土地のイマームを尊敬することがない、社会の破壊者として捉えられる。目に見えない心の問題であるが故に、武力闘争よりも恐ろしいといわれることもある。さらに、タイ政府と安全保障上の問題を回避して

いる事実も、侮蔑の背景に垣間見える。私立イスラーム学校の教員で村の指導者の一人でもある男性はこのように語った。

ワッハービーは、ムハンマドとその教友の時代になかったものを、全てイスラームではないと否定し、土地のイマームを尊敬することがありません。ワッハービーは外国とくにサウジとの関係が強く、外国からの資金を独占しています。村人に対して敬意を持って接するタブリーグと違って、ワッハービーは村人を見下しています。彼らは土地を取り返す要求をしないので、タイ政府とのあいだで安全保障上の問題を抱えていません。彼らの思想は危険です。もしかすると、タイ政府の使徒なのかもしれません⁴⁵。

4-2. ワッハービーとは誰か

2003年ルッフィは、JIとの関係を疑われ捜査を受けた。国際テロ組織や現地の分離独立派組織との関係がないことが明らかとなったのち、当時皇太子であった現ラーマ10世の訪問を受けたヤラー・イスラーム大学は、タイ政府のブラックリストから名前を消すことに成功した⁴⁶。2004年ファートニー大学に改称され、平和的手段でサラフィー主義を広めることを是に活動を続けている。サラフィー主義に否定的な人々のなかには自らを「カナ・カオ」(Th./khana kao/古い集団、保守派)や「サーイ・カオ」(Th./sai kao/古い派、保守派)と呼ぶ者がおり、シャーフィーイー学派に基づく伝統的なイスラーム解釈や土地のイスラーム実践を重視する人々を示す言葉としては伝統主義者(traditionalist)も用いられる⁴⁷。深南部において、サラフィー主義と伝統主義という対立の構図は、学校教育、ノンフォーマル教育、NGO活動など多くの場面でみられる。伝統主義者にとってサラフィー主義者とは、サウジアラビア式のワッハーブ主義を拡散し、深南部のアラブ化を進めようとする過激な人々と捉えられる。保守的な要素が強い村落部では、サラフィー主義に関わることは共同体からの排除をもたらしかねない。それにも関わらず、サラフィー主義に共鳴する人々が存在した。

村でワッハービーとみなされている人々には、ルッフィを代表とするサラフィー主義の学者やサラフィー主義の宣教師に対する支持、サラフィー主義者によって組織されている活動や学習会への参加、土地の伝統的実践をイスラーム的に誤っていると否定する、といった特徴があった。自らのことをワッハービーということはなく、自称としてはアハル・スンナ (Ar./ahl al-Sunna/スンナの徒)やサーイ・マイが用いられる。ラマダン明けのラーヨーの日に墓地で行う会食、ラーヨーの1週間後を同様に祝うラーヨーネー⁴⁸、預言者生誕祭マウリド、伝統的な割礼、婚姻、葬送儀礼をビドアであり誤りとする。また、イスラームの言葉

があるとすればそれはアラビア語である、イスラームを学ぶ言語としてマレー語やジャウィは絶対ではなくタイ語を含む何語でも学ぶことができる、クルアーンとハディースには近代的なテクノロジーも含め全て記されているとの理解もみられた。村では 2000 年代後半、学校での教育内容や親族の葬儀方法をめぐって大きな対立が生じた。時間を経て、サラフィー主義者はこうした儀礼にあえて参加しないという対応を取るものの、目立った対立は生じていない。

とくに若い世代のあいだでは、マレー・ナショナリズムを強く持つ伝統主義者と、伝統的なイスラーム的価値観を時代遅れであると捉えマレー・ナショナリズムから距離を置こうとするサラフィー主義者の違いが目立つ。村の中心にあるタディカでは、伝統主義者の教員が、ファートーニー大学を卒業した同僚である教員に、イスラーム教育はマレー語で行う必要があるし、ムハンマドの時代に戻るといふならば携帯電話もバイクも使ってはいけないはずだ、と皮肉を言う光景が見られた。ファートーニー大学出身のタディカ教員は村で唯一の「極端な」ワッハービーとして非難されていたが、生まれ育った村から排除されるということにはなかった。

一般的に、サラフィー主義は都市部を中心に、安全保障上の問題を経験しておらずタイ政府に対して悪い印象の少ない中間層のあいだで支持を広げていると考えられている⁴⁹。しかし、村落部ではサラフィー主義、伝統主義に関わらず安全保障上の問題を経験していない場合の方が少ない。ファートーニー大学で学びインドネシア留学から帰国した私立イスラーム学校助手の女性は、兄弟が分離独立運動に関与していたと疑われた。彼女は政治の話になるといつも、分離独立運動については知りたくない、政治には関心がなく、ただ良いムスリムとしてこの世界を生きただけだという。彼女にとってのイマームであり、「ウラマー」(Ar./‘ulamā’/宗教知識人)であるのはルッフィであることも強調する。

熱心なルッフィ支持者として知られるファートーニー大学職員の男性は、PSU パッターニー校に在籍していた 2000 年代後半に疑わしい人物として、村長と彼の叔父とともに軍に連行された。前郡長が彼の一族のことを嫌い、軍に情報を流してブラックリストに載せたからだという。これまで 3 回呼び出され、タイの法律やイスラームに関するセミナーを受けた。政治に深く失望した彼は、大学卒業後ファートーニー大学で職を得、勉強会やビジネスを通して、積極的にサラフィー主義のネットワークと関わるようになった。彼が強調するのも、ムスリムとしてより良く生きること、そして政治とは一切関わらないという点であった。

村はずれのタディカ校長は、バンコクの大学を卒業後家電製品販売で財を成したが、分離独立運動への資金提供が疑われたことがある。自身のことをサーイ・マイであると主張する彼は、ルッフィやサラフィー主義の宣教師として知られる

ザキール・ナイックの講演を好んで視聴している。村の伝統主義者からはイスラームをよく理解しないビジネスマンとして認識される校長は、イスラームは寛容と慈悲の宗教であること、クルアーンには既に起こった出来事やこれから起こる出来事全てが記されているのだと説明する。また、タイ政府によるイスラーム教育の試みを評価しており、イスラームという宗教を攻撃しない限りにおいてタイ政府と戦う必要はないとする。仏教徒は真実を知らないだけで、それは自分たちには関係ないことだと強調する。

サラフィー主義に共鳴する人々は、ワッハービーが村では決して受け入れられていないことを認識していた。それでもあえてサラフィー主義に関わる選択をする背景には、紛争が泥沼化するなかでムスリムとしてのアイデンティティを犠牲にすることなく、分離独立主義から距離を置くことを可能にするための基盤をサラフィー主義が提供しているという側面がある。後継者と目される人物がいないなか、ルッフィの率いてきたサラフィー主義の流れが今後どのように展開していくのかが注視されている。ルッフィ自身は、将来の深南部情勢について、記者の質問に対してこのように答えた。「もし人々が平和的な方法に利益を見出すならば、変わるだろう。そうでないならば、変わることはない」と⁵⁰。

5. おわりに

日々経験される出来事や語られる歴史は人々の帰属意識を形づくり、イスラームをめぐる価値観にも影響を与えている。タイ政府の行ってきた政策は、必ずしもマレー・ムスリムの排除を目指したものではなく、マレー・ムスリムの文化や社会を理解し包摂を試みるものでもあった。しかし、深南部のムスリム共同体に対する抑圧として捉えられる余地を多分に残すものであった。2004年にタイ政府と反政府武装組織の抗争が再燃すると、ムスリムの過激化が問題視されるようになった。しかし何を過激と捉えるかという問題は、幾重にも政治化されている。タイ政府にとって過激が意味するのは不可分一体の国土を損なおうとする分離独立主義とその支持者のことであり、諸外国で過激とみなされるサラフィー主義はイスラームをマレー・ナショナリズムより上位に掲げることによってタイ政府との安全保障上の問題を回避している。一方で、村において過激という文脈で捉えられていたのは、分離独立主義や武器をもって戦うことというよりかは、サラフィー主義を筆頭に共同体の変化をもたらす思想であった。

調査地の村において、伝統主義者と同じように政府に対する不信感を共有しながら、さらに共同体からの反発をもたらすことを認識しながら、あえてサラフィー主義に共鳴していることを示す人々がいた。サラフィー主義は、分離独立主義か

ら距離を取りつつ、かつタイ政府に敵意が無いことを示すことを可能とする。彼らにとってのサラフィー主義は、政治への失望と泥沼化する紛争のなかで、ムスリムとしての帰属意識を犠牲にせずに生きる代替案を提供するものであった。10年以上続く紛争下では、公権力及び武装組織による深刻な人権侵害が続いている。人々が求めるのが、平和であることは疑いようがない。しかしそれは単なる秩序ではなく、公正さに裏付けられた平和である。タイ深南部におけるイスラーム的価値観をめぐる相違は、単なる新旧の対立ではなく、公正さを求める奮闘の手段を何に求めるか、という違いとしても捉えられるかもしれない。

推薦者：王 柳蘭

同志社大学グローバル地域文化学部准教授

註

*本稿は、JSPS 科研費 18H05669 および 19K13637 の助成を受けて行った研究成果の一部である。

- ¹ 日本語以外の用語や書籍名については、とくに重要な場合のみ、それぞれ初出の際に、「(日本語カタカナ表記)」(Ar. or Th. or M./アルファベットの転写表記/語義)という形で表記。Ar., Th., M.はそれぞれアラビア語、タイ語、マレー語を意味する。タイ語のローマ字表記に関しては、タイ王立学士院が定めた方法に依拠する。
- ² タイ語では、一般的に南部国境県や南部国境3県という表現が用いられる。本稿では、パタニ王国の故地であり、現在も分離独立運動が続くパッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県とソンクラーク県の一部を深南部と呼ぶ。本文中では、旧パタニ王国に関連する場合はパタニ、タイの県を示す場合はパッターニーと記す。
- ³ タイのサラフィー主義研究として Muhammad Ilyas Yahprung, “Islamic Reform and Revivalism in Southern Thailand: A Critical Study of the Salafi Reform Movement of Shaykh Dr. Ismail Lutfi Chapakia al-Fatani,” (Doctoral dissertation, Islamic University of Malaysia, 2014); Joseph Chinyong Liow, “Religious Education and Reformist Islam in Thailand's Southern Border Provinces: The Roles of Haji Sulong Abdul Kadir and Ismail Lutfi Japakiya,” *Journal of Islamic Studies*, Vol. 21, No. 1 (2010), 29-58 などが参考になる。
- ⁴ 深南部情勢のモニタリングを行っている Deep South Watch によると、2004年1月から2019年5月までに生じた事件数は20,342件、死亡者は7,000名、負傷者は13,644名である(Deep South Watch 2019)。
- ⁵ 本稿で用いる現地調査のデータは、博士論文執筆時の調査(2015年5月-10月、2016年2月-3月、8月-9月)に加えて、2017年6月、2018年3月、2019年3月に深南部において実施した調査に基づく。
- ⁶ 玉田芳史「タイのナショナリズムと国民形成：戦前期ピブーン政権を手がかりとして」

-
- 『東南アジア研究』34巻1号、1996年、138-140頁。
- 7 Michel J. Montesano and Patrick Jory eds., *Thai South and Malay North: Ethnic Interactions on a Plural Peninsula*, (Singapore: NUS Press, 2008), 109-110.
 - 8 Nantawan Haemindra, “The Problem of the Thai-Muslims in the Four Southern Provinces of Thailand (Part One),” *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 7, No. 2 (September, 1976), 208.
 - 9 Barbara Whittingham Jones, “Patani-Malay State outside Malaya,” *The Strait Times*, October 30, 1947.
 - 10 Nantawan Haemindra, “The Problem of the Thai-Muslims,” 209.
 - 11 A. Bangnara, *Pattani Adit lae Pattuban* (パタニ：過去と現在), (1977), 120.
 - 12 Arifin Bin Chik, Abdullah Laoman, Suhaimi Bin Ismail, *Patani Prawatsat lae Kanmuean nai Lok Malayu* (パタニ：マレー世界における歴史と政治) (Hat Yai, Islamic Cultural Foundation of Thailand, 2015), 298. 2015年8月14日にパッターニー市内で開催されたハジスロンを偲ぶイベントでの聞き取りの際も、ハジスロンは1954年8月13日に警察によって殺害され海に沈められたと認識されていた。
 - 13 Chaiwat Satha-Anand, “The Silence of Bullet Moment: Violence and 'Truth' Management, Dusun-nyor 1948, and Kru-Ze 2004,” *Critical Asian Studies*, Vol. 38, No. 1, (March 2006), 11-37.
 - 14 Duncan McCargo ed., *Rethinking Thailand Violence*, (Singapore: NUS Press, 2007), 19.
 - 15 タイのイスラーム行政の最高機関であるチュラーチャーモンتریが行った検証を参照した。Office of Chularachamontri, *Chicheankotecing Kanbitueankhamsonsasanaislam nai Ekasan Beryihat di Pattani*. (「パタニにおけるジハード」のイスラームの教えの歪曲に関する真実の解説) (Bangkok, Office of Chularachamontri, 2006), 18-20.
 - 16 ナラティワート県の議員だったトゥンク・ジャラル・ナシールによって1959年に設立されたパタニ民族解放戦線(Barisan Nasional Pembebasan Patani: BNPP)を皮切りに、1960年設立のBRNや、1967年設立のパタニ統一解放機構(Patani United Liberation Organizatou: PULO)などが結成されている。
 - 17 たとえば Arifin Bin Chik, Abdullah Laoman, Suhaimi Bin Ismail, *Patani*, 537.
 - 18 Jabatan Penerangan BRN, “Perisytiharan Jabatan Penerangan B.R.N,” (BRN情報部による声明) <https://www.youtube.com/watch?v=lZYnDJ77fyU> (Accessed July 7, 2019).
 - 19 クルアーンの訳は中田考監修『日垂対訳クルアーン』作品社、2014年に基づく。
 - 20 深南部におけるシャヒードの意味について社会言語学者の原新太郎による論考が参考になる。Hara Shintaro, “The Interpretation of Shahid in Patani,” *Asian International Studies Review*, Vol. 20 (June, 2019), 137-157.
 - 21 Kumar Ramakrishna, See Seng Tan eds., *After Bali: The Threat of Terrorism in Southeast Asia*, (Singapore: World Scientific, 2003), 187.
 - 22 Sufam Usman and Usman Idris, *Khabuankan Wahabi Niyam lae Khwammai*, (Bangkok: Islamic Academy, 2004), 20-34.
 - 23 Sufam Usman and Usman Idris, *Khabuankan Wahabi*, 55.
 - 24 Sufam Usman and Usman Idris, *Khabuankan Wahabi*, 56-57.イスラーム復興研究を行ったスクーピンも、イスラーム改革思想はバンコクで1920年代以降インドネシア人政治難民のアフマド・ワッハーブによって広められ、アフマドの弟子であるパキスタン系ム

- スリム、ディレク・クルシリワットによって継承されたとしている。Raymond Scupin, “Islamic Reformism in Thailand,” *Journal of the Siam Society*, Vol. 68, (1980), 2.
- ²⁵ Sufam Usman and Usman Idris, *Khabuankan Wahabi*, 56.
- ²⁶ Sufam Usman and Usman Idris, *Khabuankan Wahabi*, 57.
- ²⁷ 人類学者のジョルはカナ・マイ、「カウム・ムダ」(M./kaum muda/若い世代、改革派)、アハル・スンナと自称する人々をサラフィー主義の影響を受けた Reformist (改革派) として描いている。Christopher M. Joll, *Muslim Merit-Making in Thailand’s Far-South*, (Springer, 2012), 65. ルッフィは自身をサラフィー主義と位置付けている。Duncan McCargo, *Tearing Apart the Land: Islam and Legitimacy in Southern Thailand*, (New York: Cornell University Press, 2008), 22-23.
- ²⁸ シャイフ・リダはエジプトのムスリム同胞団の思想から大きな影響を受けた人物であり、イスラーム・チャンネルである White Channel の代表を務めている。
- ²⁹ タイ深南部におけるイスラーム教育の展開については、西直美「タイ深南部におけるイスラームと帰属意識：イスラーム教育の場を事例に」『年報タイ研究』第 18 号、39-57 頁で論じている。
- ³⁰ “S-E Asia survey sheds light on attitude towards extremism,” *The Strait Times*, November 20, <https://www.straitstimes.com/asia/se-asia/s-e-asia-survey-sheds-light-on-attitude-towards-extremism> (Accessed January 31, 2019)
- ³¹ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam Sasana haeng Santiphap*. (Yala: Yala Islamic University, 2004), 57.
- ³² Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 63.
- ³³ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 70.
- ³⁴ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 73, 75.
- ³⁵ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 76.
- ³⁶ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 77.
- ³⁷ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 84.
- ³⁸ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 85.
- ³⁹ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 86-87.
- ⁴⁰ Ismail Lutfi Capakiya, *Islam*, 88.
- ⁴¹ インタビュー (2018 年 3 月 2 日)。
- ⁴² 橋本卓「タイ南部国境県におけるムスリム社会の変容と政治—経済発展とマス・メディアの影響—」(1) (2) (3)、『北九州大学法政論集』第 19 巻 2 号～4 号、北九州大学 (1991-1992)、176-195 頁、361-375 頁、457-473 頁。
- ⁴³ Anusorn Unno, “We Love Mr King”: *Malay Muslims of Southern Thailand in the Wake of the Unrest*, (Singapore: ISEAS Publishing, 2019), 44.
- ⁴⁴ 私立イスラーム学校教員、30 代男性 (2015 年 8 月 5 日)。この教員は、BRN がリクルートならびに軍事訓練を行っていたとされる、深南部地域に所在する私立イスラーム学校出身であった。タイ政府への協力者を敵とする見方に加えて、教員によると、軍・警察の殺害は、その他の治安部隊の殺害より点数が高いという考えがあるのだという。
- ⁴⁵ 私立イスラーム学校教員、40 代男性 (2019 年 3 月 24 日)。
- ⁴⁶ Krithika Varagur, “Preaching the Peace,” October 27, 2018, Pulitzer Center,

-
- <https://pulitzercenter.org/reporting/preaching-peace> (Accessed February 1, 2019)、ファートニー大学イスマイル・ルッフイ・チャバキヤ博士インタビュー（2014年11月13日）。
- 47 Joseph Chinyong Liow, “Religious Education and Reformist Islam in Thailand’s Southern Border Provinces.”; Christopher M. Joll, *Muslim Merit-Making in Thailand’s Far-South*; Muhammad Ilyas Yahprung, “Islamic Reform and Revivalism in Southern Thailand.”
- 48 ハディースでは、ラマダン月が明けた日に始まるシャワル月に、任意の6日間断食をすることが、預言者ムハンマドの慣行であるスンナとして推奨されている。深南部では、ラマダン月が明けたのち直ちに6日間断食を続けて行い、その上で断食明けを祝う場合がある。ラマダン明けのラーヨーはアラビア語ではイード・アル＝フィトル(‘īd al-fīṭr)、標準マレー語ではハリ・ラヤ・プアサ(Hari Raya Puasa)、というが、深南部ではラーヨーポーソーという呼称が用いられることが多い。ラーヨーネーのネーは、標準マレー語のエナム(Enam)、数字の6に由来する。
- 49 この点について、2019年6月11日にチュラロンコーン大学で開催された国際シンポジウム *Female Agency, and Islamic Activism: Thai Case Studies in Localizing the Global* において、サラフィー主義の村落部での受容について発表を行った際に、現地の専門家から多くの示唆を得た。
- 50 Krithika Varagur, “Preaching the Peace.”